北尾次郎研究補遺

西脇　宏

その１　北尾次郎著「大（おお）パパ北尾次郎のこと」- 紹介とドイツ語訳 -

紹介

ここに初めて紹介し，ドイツ語に翻訳するのは，北尾次郎と同名の孫，北尾次郎氏(1917-2001) が，今から 20 年前に書き記し，私宛に送付された文章である。当時，私は『森の妖精』(»Waldnymphe«) の冒頭巻と思われるⅡ－３巻の翻刻作業を行い，所属していた法文学部の紀要に順次発表していたが，紀要の投稿には枚数制限があり，第１章「迷える少年」(Der verirrte Kanbe) を活字化するにも，4 回に分けて投稿する必要があった。早くⅡ－３巻の活字化を終了し，次の作業，すなわち，続巻の確定作業に取り掛かることを目指していた私は，Ⅱ－３巻の残り２章を私費で公刊しようと計画していた。そのために，北尾次郎研究会，ないしは北尾次郎協会などといった，何らかの研究機関を立ち上げ，その機関の定期刊行物の中で, すでに実質的作業を終えつつあった第２章「みなしごの修業時代」(Des Waisenknaben Lehrjahre)，第３章「病み衰えゆく女（ひと）」(Eine Dulderin) の２章を，印刷しようと考えていたのである。

今から思えばひとりよがりの無謀な計画であったが，その時は同僚のドイツ人外国人教師の励ましや，ドイツから寄せられた好意的反応にも力を得て，北尾次郎「発見」後の持続的高揚状態にあったものと思われる。北尾次郎に関する定期刊行物が創刊されるとなれば，その劈頭を飾るのは，孫の北尾次郎氏による文章を措いて他にはないとの思いで，当時横浜市在住の北尾次郎氏に無理に執筆をお願いした。その結果，小生に託されたのが，この「大（おお）パパ北尾次郎のこと」である。今回，改めて氏からいただいた私信を再読したところ，氏は 1994 年の２月に軽い脳梗塞の発作を起こされており，片麻痺の残る病後の困難な状況で，執筆していただいたものであった。

このような貴重な文章であったにもかかわらず，当初の計画の頓挫とともに，放擲され，現在まで公にされる機会はなかった。ひとえに私の無責任と怠慢のせいである。その後，学部改組や国立大学法人化の中で，私の北尾次郎研究そのものが，全く途絶してしまったのである。

北尾次郎の独文小説の和名は『森の女神』で統一，定着していた。『森の女神』という和名そのものが北尾次郎自身に由来する可能性があったにもかかわらず，翻刻に際して，私はあえて『森の妖精』と訳した。『森の妖精』としたのには，それなりの理由があってのことだったが，そのことが北尾次郎氏に余計な心配をおかけしたようである。それ以降，氏は日本語のタイトルではなく，もっぱら原題の »Waldnymphe« を使用されたのである。この文章でも実際そうなっていたことを，今回，懐かしく再確認した。今にして思え

ば，これも私の若気の至りで，すでに定着していた和名を事々しく変更する必要など，本当はなかったのかもしれない。そのことで氏に無用の気遣いをさせてしまったのだとしたら，まことに申し訳ないことであった。無理をお願いして執筆していただいた原稿に，»Waldnymphe« と同様，今日まで「死蔵の運命」をたどらせてしまったことと併せて，今となっては，ただひたすらご霊前に詫びるのみである。

大（おお）パパ北尾次郎のこと

孫　北尾次郎

父北尾富烈が私たち子供に祖父北尾次郎のことを話すとき，大（おお）パパと呼んでいたので私たちもそれにならっていた。これは大きいパパという意味と思っていたが，最近 Opa というドイツ語（小児語おじいちゃん）のあることを知り，父はあるいはドイツ語として使っていたのかとも思う。

祖父と私とは同姓同名であるが，祖父は私の生まれる 10 年前 1907 年に死去しており，祖母北尾留枝子がもう一度同じ名前を呼びたいと言うことで私の名前が決まったそうで，その祖母も 1929 年に死去し，その記憶も定かでなく，まして祖母の語った祖父なるものも無に等しい。

父北尾富烈の死去は 1950 年で，その存命中に祖父の話を聞く時間は十分あったはずであるが，きわめて断片的なものが少数あるにすぎず，たとえば病気で倒れて一時的に快方に向かったとき久方ぶりにピアノの前にすわり，どうしても指が動かず実に悲痛な顔をしたこと，同じく一時的な恢復期に挿画入りのドイツ文小説の自筆の手稿 Waldnymphe をもって室内を歩いては時々落として大きな音を立てたこと，数学は難しくはないが物理的現象の解明にいかに組み入れるかが難しいのだと言っていたこと等々である。

要するに私が祖父について知っていることは肉親から聞いた事柄はほとんど無くて，いろいろの資料からの知識であるから，孫でなければ書けないということは皆無といって良い。

さて私たち孫どもの敬愛する大パパは物理学者で，「颶風の理論」（略称）をはじめとする業績はすべて学会誌に発表されているが，前述した挿画入りのドイツ文小説の自筆の手稿 Waldnymphe は全く未発表のもので，祖父の死後 72 年間私の手元に保管されてきた。

Waldnymphe は 22 冊からなり，なかなか大部なものであるが，1979 年 1 月，うち比較的ととのっていると思われる 1 冊を親戚の成川武夫氏（東京芸大教授，現在名誉教授）に検討してもらった結果，県出身の先達の資料という意味で，島根県に連絡をとってはどうかとの指示を得た。早速，島根県立図書館に連絡したところ，「郷土資料については館運営の柱として鋭意収集に努めており，ぜひ頂戴したい」との返が，資料課長藤岡大拙氏（当時）よりあったので，1979 年 5 月送付した。

以上の経緯で Waldnymphe は島根県立図書館に寄贈された。

その後あまり音沙汰はなかったが，1988 年 9 月，島根大学法文学部ドイツ語学文学研究

室西脇宏先生より，「最近 Waldnymphe を見る機会があり，検討をはじめた」とのご連絡をいただいた。

寄贈してから９年経過して，やはり Waldnymphe は日の目を見ることはないのかとあきらめていただけに，その時の私の喜び，感謝の気持ちは本当に大きかった。

こうしてまさに死蔵の運命にあった Waldnymphe の検討が進められ現在に至っている。

（1994 年 10 月記）

ドイツ語訳

Vorbemerkung: Die folgende Übersetzung ist nach der alten, traditionellen Rechtschreibung geschrieben.

Mein Opapa, Diro Kitao　　Sein Enkel, Jiro Kitao

Wenn mein Vater, Furetsu (Fritz) Kitao, uns Kindern über unseren Großvater, Diro Kitao, sprach, pflegte er, ihn Opapa zu nennen. Demnach nannten ihn wir Kinder auch so. Lange hatte ich geglaubt, das wäre ein japanisches Wort, das »großer Papa« bedeutet. Neulich aber habe ich erfahren, daß es auch im deutschen ein Wort Opa (Kindersprache von Großvater) gibt. Ob es mein Vater als deutsches Wort gemeint hat, frage ich mich heute.

Mein Großvater hat den gleichen Vornamen hat wie ich[1], starb aber schon 1907, 10 Jahre vor meiner Geburt. Meine Großmutter, Rueko (Louise) Kitao, wollte noch einmal den Namen ihres verstorbenen Mannes rufen können. So wurde ich Jiro genannt. Auch sie starb 1929, an sie erinnere ich mich nur dunkel, geschweige denn daran, was sie mir über meinen Großvater erzählte.

Das Todesjahr meines Vaters Furetsu war 1950. Deshalb gab es zu seinen Lebzeiten sicher genug Zeit, von ihm über meinen Großvater zu hören. Leider erhalte ich nur ein paar äußerst bruchstückhafte Episoden von ihm: zum Beispiel, daß er sehr traurig aussah, als er nach langer Zeit scheinbarer Genesung von einem Anfall am Klavier saß, aber sich seine Finger doch auf keinen Fall bewegen wollten; oder daß er auch in der vorläufigen Besserung seiner Todeskrankheit, die Handschrift seines illustrierten deutschsprachigen Romans »Waldnymphe« in den Händen, in seinem Arbeitszimmer umherging und manchmal einen großen Lärm machte, indem er sie auf den Boden fallen ließ; oder daß er zu sagen pflegte, die Mathematik selbst sei nicht schwierig, schwierig sei, wie man sie in die Erläuterung eines physikalischen Phänomens hineinnehme, und so weiter.

Kurz gesagt, es gibt so gut wie nichts, was nur ich als Enkel schreiben kann, weil ich über meinen Großvater fast nichts von den Blutsverwandten erfahren, sondern hauptsächlich von den

[1] Während man heute 次郎 nach den Latinisierungsregeln der japanischen Schrift gewöhnlich »Jiro« schreibt, hat Diro sein Leben lang seinen eigenen Vornamen mit dem Anfangsbuchstaben D geschrieben.

verschiedenen Materialien bekommen habe.

Nun unser Opapa, den wir Enkel lieben und verehren, war Physiker und angefangen mit seiner »Theorie der Bewegung der Erdatmosphäre und der Wirbelstürme« sind alle seine wissenschaftlichen Abhandlungen in den akademischen Zeitschriften veröffentlicht. Andererseits ist die obengenannte Handschrift seines illustrierten deutschgeschriebenen Romans »Waldnymphe« ganz und gar unveröffentlicht und nach seinem Tod 72 Jahre lang bei mir aufbewahrt.

»Waldnymphe« ist recht umfangreich und setzt sich aus den 22 Bänden zusammen. Einen relativ gut erhaltenen Band habe ich im Januar 1979 Herrn Prof. Takeo NARIKAWA (jetzt emeritiert.) an der Kunst- hochschule Tokyo, der auch mein Verwandter ist, untersuchen lassen. Von ihm habe ich einen Rat bekommen, »Waldnymphe« sei als Material eines Pioniers aus der Präfektur Shimane von Belang, also würde ich mich besser mit der Präfekturverwaltung in Verbindung setzen. Sofort habe ich mit der Präfekturbibliothek Shimane Kontakte aufgenommen. Dann habe ich eine Antwort von Daisetu FUJIOKA, dem damaligen Leiter der Materialienabteilung der Bibliothek, erhalten: „Was heimatliche Materialien anbelangt, konzentrieren wir uns darauf, sie als Stütze für die Bibliothekführung zu sammeln. Wir freuen uns sehr, die »Waldnymphe« in Empfang zu nehmen.“ Im Mai 1979 habe ich sie an die Bibliothek geschickt.

Unter den obenerwähnten Umständen ist die »Waldnymphe« der Präfekturbibliothek Shimane geschenkt worden.

Seither hatte ich lange fast nichts mehr davon gehört, bis im September 1988 Herr Prof. Hiroshi NISHIWAKI (Shimane Uni., Germanistisches Seminar) mir mitgeteilt hat: „Neulich haben wir Gelegenheit gehabt, die »Waldnymphe« anzuschauen und haben angefangen, sie wissenschaftlich zu untersuchen.“

Schon 9 Jahre waren nach der Schenkung vergangen und ich hätte mich fast damit abfinden müssen, daß die »Waldnymphe« doch nicht ans Licht der Öffentlichkeit kommt. Um so größer waren da wirklich meine Freude und meine Dankbarkeit.

So wurde die »Waldnymphe« aus dem Dornröschenschlaf geweckt und wird bis heute weiter untersucht.

(Oktober 1994)

その２　北尾次郎「伯爵夫人のメルヒェン」- 紹介と翻訳 -

紹介

北尾次郎の独文小説 »Waldnymphe« の全貌は，私にはついに捉えられないままで終わった。怠慢のせめてもの償いに，今回，Ⅱ -3 巻第 3 章に含まれる伯爵夫人フリーデリーケの

メルヒェンを個別に取り出して，ここに紹介，訳出し，末尾にドイツ語原文の翻刻を掲載する。原文にはタイトルはなく，「伯爵夫人のメルヒェン」(Märchen einer Gräfin) は，私による仮題である。Märchen は，通常「童話」と訳されるが，伯爵夫人の話は，童話のおとぎ話とは程遠い内容なので，あえてカタカナ書きで「メルヒェン」とした。

Ⅱ -3 巻全体の梗概は，1994 年 11 月 12 日，松江市で開催された第 44 回日本独文学会中国四国支部研究発表会における私の研究発表「北尾次郎『森の妖精』について」で発表し，当日の配布資料にも含まれていたが，今まで印刷，公表をしていなかった。今回新たに見直し，Ⅱ -3 巻全体および「伯爵夫人のメルヒェン」の位置づけ理解の一助として，翻訳の前に，まず最初に収録することとする。

Ⅱ -3 巻のあらすじ

第 1 章　迷える少年（Der verirrte Knabe）

物語は南ドイツの架空の町，聖アルバン市近郊のブラックモン伯爵領を中心的舞台として展開する。1855 年の冬，クリスマスツリーを取るため，伯爵夫人フリーデリーケとヒルデガルトは山番をつれて，居城近くの森にはいる。ヒルデガルトは危うく切り倒した木の下敷きになりそうになる。突然見知らぬ少年が飛び出して，ヒルデガルトを助ける。章題の「迷える少年」とはこのみすぼらしい，ぼろぼろの服をまとった少年のこと。

少年の名前はマンフレート　ハーゼで，問われるままに自分の境遇について話す。

両親（血のつながっていないベルリンの薬屋のワーグナー）の虐待。父母のいない子供を育てる森に住んでいるという妖精のこと。自分が探している妖精とは夢にでてくる本当のママのすがた。

ブラックモンに住むおばさんが，マンフレート　ハーゼと言う少年を探していると一年前に客の一人から聞き，それ以来小銭をためてようやくベルリンから逃げてきたことなど。

突然少年は疲労と空腹のため意識不明となり，倒れてしまう。伯爵夫人は少年に心覚えがあるようすで，少年の話にただならぬ反応を示す。昏倒した少年を城に運び，ヒルデガルトと二人で熱心に看病する。

この時，ヒルデガルト 6 才，マンフレートは 11 才ぐらい。城にはヒルデの姉のマティルデ（13 才）も住んでいる。

万事において対照的な姉妹（妹は命の恩人を兄のように慕うが，気位の高い姉は素性の知れない市民のマンフレートを城にいれることにさえ反対）

やがて健康を回復したマンフレートは小姓として伯爵夫人に仕えることとなるが，夫人は使用人としてではなく，自分の子供のように扱い，令嬢達と同じ教育をうけさせる。ただし，家庭教師達には「うすのろ」(Hansdampf) との評判。

マンフレートは，頭より体を使うほうに才能がある。14 才になったとき，粉屋の 3 才の息子の命を救うなど，数々の「英雄的行為」（Heldentat）を行う。マンフレートの適性を理解した伯爵夫人は，ヒルデガルトの「近従」（Paladin）となるように言う。

マティルデの行状が原因で，伯爵夫人の病状は悪化する。貴族とのつきあいを避け，ひ

っそりと暮らしている夫人にたいして，マティルデは活発で社交好きで，城では孤立して，母を手こずらせる。マティルデと従兄弟のオスカーは恋仲になっている。

30年来伯爵家に仕える侍医のシュルツ博士の手当で，伯爵夫人はやがて快方に向かうが，ある夜，診察後のシュルツ博士にマンフレートは，忠告を求めたいので，話を聞いてほしいと，引き留められる。孤児だった少年が，拾われて第2の母と慕うようになった婦人の家が，その少年の両親の死に責任があるとわかったら，その少年はどうすればよいのか。

愚か者のマンフレートはまったく気づかないが，医者の話は彼自身のこと。そしてそのことが序文で言われている「償われていない犯罪」[2] だと考えられる。

具体的には言及されないが，ヒルデガルトも伯爵家とは血のつながりはなく，その両親の死に関してもブラックモン家に責任があるらしい。

これ以降，将来的にはマンフレートとヒルデガルトを結婚させて，ブラックモン家を継がせ，そのことによってブラックモン家が過去に犯した罪を償おうとする伯爵夫人と，過去の罪を糊塗して悪行を繰り返し，破滅への道を進む一族との，善と悪の対立の図式が明かとなる。

悪の側の一番手として登場するのが，ブラックモン近郊のラウダンに住む伯爵夫人の姉，グライフェンシュタイン男爵夫人のアーデルハイト。

狂信的なカトリックで，金の亡者。一日も早く息子のオスカーとマティルデを結婚させて，ブラックモンの財産の乗っ取りをねらっている。そんな母親に反発したオスカーは家を飛び出し，直接伯爵夫人にマティルデとの婚約の許可を求める。伯爵夫人は，両親の家から独立して，職業を持ち自分で生計を立てるというふたつの条件をつけて，婚約を許可する。

オスカーの大学進学祝いにラウダンに招待されたマンフレートは，男爵夫人の策略を恐いもの知らずの無知で無事切り抜け，オスカーの友人達と意気揚々とブラックモンに引き揚げてくる。

その夜，伯爵夫人から強く懇願されて，マンフレートははじめて伯爵夫人をママと呼び，自分を息子にしてくれるよう頼む。

第2章　みなしごの修業時代（Des Waisenknaben Lehrjahre）

マンフレートが16才となった年の9月末，伯爵夫人はマンフレートとヒルデガルトをともない，10年以上も足を踏みいれたことのない首都M［おそらくミュンヘンであろう］にやってくる。マンフレートがギムナジウムに入学するため。マンフレートは予想に反し好成績でTertia（第4，5学年）に入学。

都では伯爵夫人の叔父のカール　フォン　ブラックモン夫妻が待ちもうけていて，町外れに居を構えひっそりと暮らす伯爵夫人をしきりに社交界へ誘う。

マティルデは水を得た魚のように社交界を泳ぎ回り，王妃の舞踏会では舞踏会の女王に

[2]「何世代にもわたって，償われることなくブラックモン家に積み重ねられた犯罪も知っていた．世評を欺き，敬愛すべき人々として生きたが，償われていない犯罪の罰を受けて滅んでいった人々のこともよく知っていた．」「北尾次郎『森の妖精』－翻刻と翻訳 (1) －」,『山陰地域研究（伝統文化）』No.8, 1992, Mar., 24ページ右。

選ばれる等，浮かれた毎日を送る。心労が重なった伯爵夫人は，ある日，ラウダンの手のものの放火で倉が全焼し，今年の収穫が全部ダメになったという執事からの電報を手に意識不明となる。伯爵夫人の条件を満たす前に，マティルデと実質的に夫婦生活をおくるようになったオスカーを，家から追いだした方が良いと考えるようになった伯爵夫人に，マティルデは，財産を今すぐ自分にゆずって隠居するか，さもなければ自分はカール伯夫妻とパリへ行くと迫る。伯爵夫人はマティルデを廃嫡し追放する。

翌日伯爵夫人の旧友，フォン某男爵が来訪し，夫人の前夫ヨーゼフが今都にいて，カール伯と結託してマティルデを動かしているのだと告げる。伯爵夫人はマンフレートとヒルデガルトに財産を相続させたいとの意志を明らかにし，自分が早く死んだ時のために，二人の後見人になってくれるよう男爵に頼む。

つづいてカール伯の妻が現れ，外交家としての手腕を発揮し，マティルデのことをあれこれと取りなそうとするが，伯爵夫人は聞き入れない。

年が変わり，カール夫妻はマティルデとともにパリに赴任する。

これ以降3年間伯爵家では格別のこともなく平穏に過ぎる。その間に，二人目の後見人を，シュルツ博士に頼む。夏はグライフェンシュタインにある別荘で過ごす。伯爵夫人と子供たちだけの空想の王国。

伯爵夫人は元気を回復し，黒い服を脱ぎ，ヒルデガルトの姉とまちがわれるほど若返る。一方マティルデとオスカーはあいかわらず社交界で浮き名を流し，伯爵夫人にふられた親戚の男どもは腹いせに，伯爵夫人とマンフレートが婚約しているという噂を流す。

3年後マンフレートは19才でギムナジウムを終え，周囲の驚いたことに卒業試験で優秀な成績をおさめる。やがてホルシュタイン問題が発生し，マンフレートは王子の近従として出陣し，王子の一人の命を救うなどの活躍をし，勲章を胸に凱旋する。かくしてマンフレートの「修業時代」は終わる。

マンフレートが無事帰還し，再会の歓喜と幸福の絶頂にある伯爵夫人に，女王から舞踏会への招待状がくる。手紙の中で女王はヒルデガルトをルイーゼ王女の女官として宮廷へ出すよう所望する。マンフレートを出迎えた駅頭で王子の一人がヒルデガルトを見初めたらしい。伯爵夫人はその夜のうちにおおあわてでブラックモンに取って返し，病気の発作が出たと断りの手紙を書く。不吉な予感のうちに第2章は終わる。

第3章　病み衰えゆく女（ひと）（Eine Dulderin）

戦功によりマンフレートが貴族に列せられるのではとの期待は，国王の突然の死により無に帰す。

若い二人の後見人の一人だったシュルツ博士が，新しくできた病院の院長として香港へ赴任することになり，彼の代わりの後見人を見つけなくてはならなくなる。某男爵はフーゴ伯を提案し，博士も同意見。

伯爵夫人の健康は徐々に衰え，自らの最期が遠くないことを予感する。

ある日，夫人はメルヒェンに仮託して自分の不幸な青春を二人に告白する。

虚栄心のため，遠い国［おそらくロシア］の王子にだまされ，命からがら逃れたが，その王子の子を妊娠しており，帰路で結核になったこと。誘惑の手引きをした男とその後結婚し，子供を産んだこと。

復讐を口にするマンフレートを夫人は「神が復讐してくださる」と説得する。

後見人依頼のため三人はエルビングを訪れるが，出迎えるはずのフーゴ伯とその母親はいつまでたっても姿を見せない。

某男爵から手紙がきて，カール伯がやがてパリから戻り，法務大臣になること。マンフレートが伯爵になれるかどうかは彼の力によるところが大であること。マティルデはウィーンで，カール伯の娘ヘドヴィヒと一緒に暮らし，おとなしくしていること。フーゴのウィーン行きは，カール伯の勧めでヘドヴィヒと婚約するためであること，等を知らされる。

最後の頼みの綱であった某男爵ですら，今やカール伯の力を当てにしなければならない状況となってしまった。　すべては伯爵夫人を孤立させるためのカール伯の策略であったことを知った夫人は，ブラックモンへ傷心の帰宅をする。

9 月始め 3 人はゲッティンゲンへ移る。マンフレートが大学に通うため。

伯爵夫人は「ハーゼ夫人」の偽名で暮らし，ときどきマンフレートの若妻に間違えられるのを喜ぶが，いよいよ自分の最期が近いのを予感する。

10 月末執事から手紙が来る。近くで演習があるので，オットー王子がブラックモンに行幸するとのこと。ヒルデガルトが宮廷に取られることを心配した夫人は一人で帰宅する。

出発から 10 日目の夜，心配して待つ若い二人のもとに，伯爵夫人の死を知らせる急報が届く。最大の理解者であり，保護者であった伯爵夫人を失ったマンフレートとヒルデガルトの若い二人は，いよいよたった二人だけで悪の支配する世間と立ち向かわなくてはならなくなる。若い二人の運命やいかに。

伯爵夫人のメルヒェン

むかしむかし一人の王女がおりまして，その王女には若い遊び友達がつけられていました。この子は，だれもがこぞってたいへん美しいというものですから，世間知らずにもすっかり高慢となり，自分も王女と同じように王子と結婚できるのだと思っておりました。殿方やご婦人方も，宮廷随一の美人だと絶えず娘にうそを言い，さらに鼻持ちならなくなった娘は，まじめに結婚を申し出た男たちを一人残らず嘲笑し，プリンセスになるのだとますます堅く思いこんだのでした。そんなとき，遠い遠い王国から一人の王子が，若い叔父を連れてやってきました。王子の父親が命じたとおりに，王女に求婚するためでした。この二人の王子は, 外見は美しく立派でしたが, 嘘偽りに関してはすでにお手のものでした。

王子は花嫁と決められた王女に対して，両親や廷臣たちの目の前では，夢中な様子で，とても感じよくふるまいました。本当のところ王子が夢中になったのは，王女の年少の友達で，こちらの方が花嫁よりかわいく，きれいだと思いました。王女は花婿に対して，両親や廷臣たちの目の前ではとてもあいらしくふるまいましたが，王女が夢中になったのは，

花婿の若い叔父で，むしろこちらと結婚したいと思いました。しかしお姫さまというものは決して自分の心に従うことはできないので，この点では厩の下女よりみじめなのです。王さまや重臣たちがかくかくしかじかの王子とめあわせると言えば，どんなにさからっても無駄で，全く愛してもいないその男と結婚しなければならないのです。

さてその若い叔父は若い女官をたいへん気に入り，自分の妻としてつれて帰ろうと思いました。女官もその叔父を大好きになりましたが，それは単に王子だからというだけではありませんでした。

王さまはそのことに大満悦で，女王さまも同様でした。女官の年老いた父親は二つ返事で承諾し，郷里の国の城と領地を彼女に約束しました。というのも彼女のものとなった王子は，自分の国が全然気に入らないので，一緒に彼女の国へ行き，そこで一生過ごすと，彼女に約束していたからです。すでに別の王子をあてがわれていた王女は激怒し，その若い娘に対して恐ろしい復讐を誓いました。一番の美人は王女ではなく彼女だと人々がいつも口にするので，王女は彼女のことが我慢ならなかったからです。しかし王女はその娘に偽りで格別の親切心を見せ，自分と一緒に王国へ行って，そこで一緒に結婚式を挙げようと言いました。王女はしかし密かに一人の廷臣を呼び寄せました。この男はうそをつくことに関しては達人で，自分のことを袖にしたので，この男もその娘に腹を立てていました。どうしたらその若い娘を，身投げするよりほかなくなるほど不幸にできるだろうかと，王女はこの廷臣と密議をこらしました。もちろんその若い娘は，たくらまれた黒い陰謀のことなど知る由もありませんでした。といいますのも，遠くの王国への途次，かつてないほど王女は彼女に親切でしたし，うそつきの廷臣は礼節を守っていたからです。多くの河を渡り山を越えていくうち，その若い娘は結婚の喜びにもかかわらず何度も何度もふるさとのお父さんやお母さんのことが心配になりました。それは彼女がきっと無事にはふるさとに帰れないだろうことを予感するかのようでした。

彼女が遠い王国の都に着いたとき，彼女は確かにふるさとやお父さん，お母さんのことを忘れました。といいますのも，そこの宮廷はもしかすると故郷の宮廷より嘘偽りが横行しており，王さまや女王さま，廷臣たちがこぞってその若い娘を王女さまのように歓迎したからです。そのことは虚栄心の強い娘にたいへん気に入りました。最初の喜びとやがてプリンセスになるという希望が近づいたのに有頂天となって，見えるものも見えなくなってしまった娘は，自分の婚約者が悲しみに沈んだ目つきをしており，舞踏会や遠出のときに宮廷の面々にしらを切って，彼女が自分の婚約者でなかったように言うのに気がついていませんでした。彼女は知らなかったことですが，彼にはすでに花嫁たるべき王女がおり，王さまである自分の兄の怒りを我が身に負うつもりがなければ，その王女と結婚しなければならなかったのです。彼の兄は恐ろしい支配者で，自分の意志に従わなければ，弟を投獄したり，姉妹を修道院に閉じこめることなど何でもありませんでした。婚約者は体も大きく男らしい風采でしたが，臆病な人間だったのです。

これらすべてのことをその若い女官は知りませんでした。さらに，彼女が仕えている王女とうそつきの廷臣がしょっちゅう王さまには，王さまの末の弟が自分たちの一行の若い

女官を好きになり，花嫁を捨てようとしているとささやき，若い女官の婚約者には，もし彼女を手放したくないなら，一緒に王国から逃げるようにと説得していることなど知る由もありませんでした。女官はそんなことはつゆ知らず，三人から婚約者と一緒に故郷に逃げてそこで式を挙げるようにと説得を受けたときに，王女の善意や婚約者の誠実さ，廷臣の実直さを信じていました。そんなとき，王さまが彼女の婚約者にしかじかの日に花嫁の王女を連れ戻るようにと命じたのでした。しかし女官は，逃亡しそのような不名誉をわが身に負うことは欲していませんでした。あくまで彼女は婚約者がおおやけに自分と婚姻し，兄の怒りのために被るであろうあらゆる困難に婚約者が冷静に耐えることを望んでいました。

婚約者は約束して言いました。「おまえとは別れたくない。二三日後には，兄が結婚を許してくれたと大喜びでおまえのところへ戻ってくる。だがとりあえずは内々で，都ではなく，自分の城がある別の遠く離れた町で式を挙げよう。」王女やうそつきの廷臣も婚約者と同じことを言ったので，若い女官は信じないわけには行かなくなりました。女官は王さまのところへ行き，許しによって婚約者を失わずにすんだことのお礼を言おうとしました。しかし婚約者は言いました。「それはいけない。王さまはまだ激怒しているし，あの王国の使節がまだ王さまのところにいて，どうしてわが国の王女が拒絶されなければならないのかと激しく詰問しているから。」

若い女官が謹厳な友人の忠告にしたがって，婚約者をあきらめていれば良かったのに。その友人は彼女と同郷で故郷におり，彼女と結婚したいと思っていたのに。しかし彼女は気高く嘘偽りのないと思われた王子を自分の愛で幸せにし，プリンセスとして幸せになろうと思いました。虚栄心で目のくらんだ女には，称号や富が愛においては何の価値もないものだとはまだ知りませんでした。愛は荒涼たる海辺の岸壁にあるみすぼらしい小屋の中でも夢み，愛するものなのです。虚栄心の強いうぬぼれ屋だった彼女は，愛し愛されたいと思っていました。しかしそれは彼女が今まで仕えていた王女と同じようにプリンセスとしてでなければなりませんでした。彼女が若い頃におまえと同じように彼女のマンフレートを見つけさえしていれば。宮廷のしょう気を呼吸せず，おまえと同じように岩や茂みに囲まれ，内面の若い女王として静かに暮らしてさえいれば，彼女は本当の幸福を見いだしていただろうに。その幸福は心の中にあり，それゆえどんな王さまにもどんな皇帝にも奪われることはない。そしてたとえそれが木のほこらであろうと，彼女はまだ明るく健やかに暮らしていたでしょう。心から愛し合い，別れること以外の不幸を知らない二人にとっては，人生はとても単純で，簡単なものだからです。妻は夫に守られるというつとめ以外知らず，夫は妻を守るというつとめ以外知らない。この地上が，自分たちが流れついてしまった人気（ひとけ）のない未開の島以外の何ものでもないかのように。

若い女官はこんなことは何にも知りませんでした。彼女は多くの人と一緒に暮らし，うわべはプリンセスとして，賛美されたり，ちやほやされたかったのです。それが彼女の身の破滅だったのです。彼女は婚約者とうそつきの廷臣とともに隠密裡に旅立ち，恐ろしく大きな王国の遠い遠い町へと向かいました。王女の女官の何人かが，密かについていきま

した。

途中の小さな町で一行は逗留し，小さな教会へと行きました。祭壇にはすでに黒い祭服を身にまとい，長い長いひげを蓄えた司祭が立っており，若い女官はそこで王子とめあわされ，それから夜になると内部は美しくしつらえられた真っ暗な城へとつれて行かれました。そこでその高慢な女は，今やっとプリンセスになったのだとの思いを抱いて，とても幸せに過ごしました。二三日たって彼女の夫が言いました。一週間ばかり王さまのところへ行かなくてはならないが，迎えに戻るまでここでのんびり過ごしているようにと。

そこで若いプリンセスは一人で真っ暗な城に残りました。身の回りの世話をするために女官や，美しく着飾ったたくさんの従僕がいたとはいえ，彼女は恐ろしく孤独でした。薄汚い女やいつも酔っぱらっている兵士たちもいて，これらの人は挨拶するにも，プリンセスが当然受けるべきうやうやしさを全く示さず，彼女のことを土地の言葉で「よその娘」と呼んでいました。彼女は侍女や侍従から囚人のように扱われました。城を出ていくことは決して許されず，いつも監視つきで庭を散策することだけが許されました。

そこで彼女は都にいる夫に宛てて，「戻ってきてください。でなければ知り合いの婦人を何人か私のもとに送ってください」と手紙を書きました。返事は来ませんでした。若いプリンセスはますます不安になりました。ある夜彼女が使っている女中の一人が寝室に忍び込み，結婚証明書がしまってある書き物机の引き出しをこじ開けようとしたとき，いったいそれがどういうことなのか彼女にはわかりませんでした。

ある日，彼女は庭で城の執事の子供が新聞紙で遊んでいるのをみました。何の気なしにその紙を手に取り，彼女は読みました。自分の夫がとなりの国の王さまの娘と結婚したと読んだのです。

そのとき，彼女は読み間違えたのだと思いました。しかし大きくはっきりと印刷されていました。自分はプリンセスなんかではなく，王子の巧みなうそによって名誉を失った娘となってしまったと思いました。彼女は司祭のもとへ行き，自分が王子の本当の妻になったのではなかったかと尋ねようとしました。お気の毒ですがとニタニタ笑いながら，「あなたは町中へでることを許されてはいません」と彼女は言われました。つまり彼女は囚われの身で，重病になるに違いないと思いました。しかし彼女は気を取り直して，兵士の一人に多額の現金を与えました。とうとう兵士はちょっとなら，ただし夜中にこっそりと，町へ行っても良いと許してくれました。

彼女は持ち物全部をかき集め，真夜中に忍び足で城から出て，見つかったら殺されるという不安を抱きながら眠っている兵士たちのそばを通り，町へでました。それから司祭の家へ行き，彼を起こしました。彼女を祝福したのとは全く別人の司祭が目の前にいぶかしげに立っているのをみて，彼女は完全に気が狂うに違いないと思いました。その司祭は，この結婚証明書は偽造されたもので，彼女を祝福したのはニセ司祭だと気の毒そうに言いました。しかし彼女は気が狂いませんでした。自分がなにをすべきか，すぐ理解しました。「逃げるのよ。山や河を越えふるさとへ逃げよう。たとえこの身がどうなろうとも。」

同情した司祭は彼女に自分の女中の服を与えました。それは薄汚れた古着でしたが，お

お喜びで彼女は自分の美しいイヴニングを引き渡し，すぐさま旅立ちました。季節は冬でした。旅の途中で彼女は風邪を引き，死ぬんじゃないかと思うほど具合が悪いと感じましたが，沼地やぬかるみを越えて先へ先へと旅を続けました。彼女はみじめな干し草小屋や，農夫の汚い寝床で眠りましたが，踏み出す一歩ごとにあの恐ろしい王国から逃れられると思うとただただうれしいばっかりでした。

その旅も国境で終わりとなりました。彼女は国境警備隊によって捕らえられました。死を覚悟して彼女が素姓をあかすと，とある家へとつれて行かれ，しばらく少しまともな看病を受けました。二三日後警備隊長が言いました。「書き物を全部引き渡し，なにも口外しないと誓うなら，家へ帰ってよろしい。」大喜びで言われたとおりにして，彼女は自由の身となりました。故郷の父親のところへ帰り，この年老いて腰が大きく曲がった男の首で一緒に泣くことを許されたのでした。

彼女は長い間重病で臥せっていましたが，王子と一緒に王女が万事を企て，後になっていけしゃあしゃあと同情して，名前だけの妻にするために彼女に求婚したうそつきの廷臣が，彼女がどんな目に遭うかを全部知っており，彼女をだますためにニセの司祭を手配したことを知って以来，永遠に病気となりました。彼女はもし死んでいなかったら今でも生きているでしょう。ひっそりと，でも彼女は一人ではありません。彼女のことを憐れに思われた神さまが二人の子供を彼女に贈られたからです。ご自分の天上から二人の天使を，おまえたちと同じように男の子を一人と，女の子を一人贈られたのです。それによって彼女が人間の中にある愛や誠をまだ信じ，神を冒瀆する者とならずにすむように。彼女は今はたいへん幸せで，こうむった苦悩やゆっくりとした衰弱さえ一笑に付すことができます。彼女は二人の天使の母親となったのですから。重い病に冒され，神や人間に絶望しながらさまよっていたときに，神さまがこの天使たちを見つけさせてくださったのです。

Märchen einer Gräfin

Vorbemerkung: Die folgende Wiedergabe des handschriftlichen Textes von Dr. Diro Kiato ist nach der alten, traditionellen Rechtschreibung geschrieben. Die textkritischen Anmerkungen, deren Angaben allzu umständlich wären, sind hier in dieser Auflage ausgelassen.

Es war einmal eine Königstochter gewesen und hatte eine junge Gespielin gehabt, die man allgemein sehr schön fand, die darum in ihrer Unerfahrenheit gar eitel wurde und glaubte, sie könnte ebenso gut wie die Königstochter einen Königssohn heiraten. Die Herren und Damen logen ihr immer vor, sie wäre die Schönste am ganzen Königshof, und machten sie noch eitler, daß sie aller ehrlich meinenden Freier spottete und sich immer fester in den Kopf setzte, eine Prinzessin zu werden. Da kam aus fernem, fernem Königreich ein Königssohn mit seinem jungen Oheim, um die Königstochter zu freien, wie sein Vater ihm befahl. Es waren zwei

Königssöhne, groß und schön anzusehen, aber schon in Lügen und Betrügen wohlgeübt.

Der Königssohn schwärmte und tat so lieb gegen seine bestimmte Braut vor den Augen der Eltern und der Hofleute, in Wirklichkeit schwärmte er für die jüngere Gespielin der Königstochter, welche er schöner und netter fand als seine Braut. Die Königstochter tat gegen ihren Bräutigam so lieb vor den Augen der Eltern und Hofleute, sie aber schwärmte für den jungen Oheim des Bräutigams und wollte ihn lieber nehmen. Aber die Fürstentochter können nie ihrem Herzen folgen und sind viel elender daran als eine Stallmagd, und wenn der König und seine Räte sagen, sie nimmt den oder jenen Königssohn, dann hilft kein Sträuben, und sie muß den nehmen, den sie gar nicht lieb hat.

Der junge Oheim hatte nun das junge Hoffräulein gar zu gern und wollte als seine eheliche Frau mitnehmen, und sie hatte ihn sehr gerne gehabt, nicht bloß, weil er ein Königssohn war.

Der König war sehr zufrieden damit und desgleichen die Königin, und ihr alter Vater sagte ja und Amen dazu und versprach ihr ein Schloß und ein Gut in dem Königreich, wo sie zu Haus war, weil ihr Königssohn ihr versprochen hatte, mit nach dem Königreich zu ziehen und dort für immer zu bleiben, da es ihm in seinem Königreich gar nicht gefallen wollte. Die Königstochter, die schon einen Königssohn hatte, war wütend und schwor dem jungen Mädchen eine fürchterliche Rache, da sie sie überhaupt nicht leiden konnte, weil die Leute immer sagten, sie wäre die Schönste, nicht die Königstochter. Sie aber log dem Mädchen große Freundlichkeit vor und sagte ihr, sie möchte nur mit ihr nach dem Königreich kommen, und mit ihr zusammen dort Hochzeit halten. Sie läßt aber im geheimen einen Hofmann kommen, der im Lügen Meister war, der auch über das Mädchen wütend war, weil sie ihn verschmäht hatte, und beriet mit ihm hinter verschlossenen Türen, wie das junge Mädchen so unglücklich zu machen wäre, daß ihr nichts übrig bliebe, als ins Wasser zu gehen. Das junge Mädchen wußte natürlich nichts von dem schwarzen Komplott, das geschmiedet wurde; denn die Königstochter war netter und der junge Lügenhofmann artiger als je gegen sie gewesen, als sie mit ihnen reiste nach dem fernen Königreich über so viele Flüsse und Berge, daß das junge Mädchen trotz ihrer Freude gar oft Bange hatte wegen Vater und Mutter daheim wie in Vorahnung, daß sie ganz sicher nicht glücklich heimkehren würde.

Als sie in der Hauptstadt des fernen Königreichs ankam, vergaß sie freilich Heimat, Vater und Mutter, denn der Hof dort war womöglich noch mehr in Lug und Trug geübt als der daheim, und der König und Königin und der gesamte Hofstaat empfingen das junge Mädchen, als wäre sie eine Königstochter, was der Eitlen sehr gefiel. In dem Rausch der ersten Freude und der nahen Hoffnug, bald eine Prinzessin zu werden, hatte die Verblendete nicht bemerkt, wie vergrämt ihr Bräutigam dreinschaute, wie er sie vor dem Hof beim Ball und bei der Tour verleugnete, als wäre sie nie seine Verlobte gewesen; sie wußte nicht, daß er schon eine Königstochter zur Braut hatte, daß er sie heiraten mußte, wenn er nicht den Zorn seines Bruders, des Königs, auf sich laden wollte, eines schrecklichen Herrschers, dem es eine Kleinigkeit war, seine Brüder

ins Gefängnis zu werfen und seine Schwester ins Kloster einzusprerren, wenn sie nicht seinem Willen gehorchten, daß er trotz seiner Größe und mannhaften Erscheinung ein feiger Mensch war.

Das alles wußte das junge Hoffräulein nicht, noch, daß die Prinzessin, der sie diente, und der Lügenhofmann immerfort dem König zuraunten, daß sein jüngster Bruder im Begriff sei, seine Braut zu verlassen und das junge Mädchen in ihrem Gefolge liebzugewinnen und dem Bräutigam des jungen Mädchens zuzureden, daß er, wenn er sie behalten möchte, mit ihr aus dem Königreich fliehen möchte. Sie wußte nichts davon und glaubte an die Güte der Prinzessin, an die Treue ihres Bräutigams, an die Aufrichtigkeit des Hofmanns, wenn sie ihr zuredeten, mit ihrem Bräutigam zu fliehen nach ihrer Heimat und sich dort mit ihm zu verheiraten, als der König befahl, daß ihr Bräutigam an dem und dem Tage seine Königstochter heimhole. Sie aber wollte nicht fliehen und so Unehre auf sich laden, und sie verlangte durchaus, daß ihr Bräutigam sich öffentlich mit ihr vermähle und gelassen alles ertrage, was der Zorn seines Bruders über ihn verhänge.

Ihr Bräutigam sagte zu, er wollte von ihr nicht lassen, und kam dann nach einigen Tagen zu ihr sehr froh, daß sein Bruder ihm erlaubt, sie zu heiraten, aber vorläufig im geheimen, nicht in der Hauptstadt, sondern in der anderen weit fernen Stadt, wo er sein Schloß hatte. Die Prinzessin und der Lügenhofmann sagten auch dasselbe wie ihr Bräutigam, bis das junge Mädchen es glauben mußte. Sie wollte zum König gehen und ihm danken für die Erlaubnis, ihren Bräutigam behalten zu dürfen, aber ihr Bräutigam sagte, sie dürfte nicht, denn der König wäre noch wütend und der Gesandte jenes Königreiches wäre bei ihm und frage zornig, warum seine Königstochter abgewiesen werden soll.

Hätte das junge Mädchen nur ihrem Bräutigam entsagt auf den Rat eines ernsten Freundes, der aus ihrer Heimat dort war, der sie auch gerne haben wollte! Sie aber wollte den Königsshon, der ihr so edel und wahr erschien, glücklich machen mit ihrer Liebe und glücklich werden als eine Prinzessin, die eitle Verblendete, die noch nicht wußte, daß der Titel und der Reichtum nur ein Tand sind in der Liebe, die träumte und liebte auch in einer elenden Hütte am wilden Felsenstrand. Sie, die Eitle, Hoffärtige wollte lieben und geliebt werden, aber als eine Prinzessin wie die Königstochter, der sie bisher gedient. Hätte sie nur in ihren jungen Jahren gleich dir, mein Nymphchen, ihren Manfred gefunden. Hätte sie nur nie die Pestluft des Hofes eingeatmet und gleich dir, mein Nymphchen, im Felsen und Gebüsch still gelebt als eine junge Königin von Innerlich. Sie hätte ein wahres Glück gefunden, das im Herzen liegt, und daher von keinem König, keinem Kaiser geraubt werden kann, und lebte noch gesund und heiter, und wenn es auch in der Höhle eines Baumes wäre; denn das Leben ist so leicht, so einfach für ein Paar, das sich von Herzen liebt und kein Unglück kennt als getrennt zu werden, und wo die Frau nichts kennt als ihre Pflicht, von ihrem Mann beschützt zu werden, und der Mann nichts kennt als seine Pflicht, seine Frau zu beschützen, als wäre diese Erde nichts als eine wilde, menschenleere

Insel, auf die sie verschlagen worden sind.

Das junge Mädchen wußte das alles nicht. Sie wollte mit so vielen Menschen zusammenleben, von ihnen bewundert und gehätschelt, äußerlich als eine Prinzessin. Das war ihr Verderben gewesen. Sie reiste denn mit ihrem Bräutigam und dem Lügenhofmann ganz heimlich ab nach einer fernen, fernen Stadt in dem ungeheuer großen Königreich. Ein Paar Hofdamen der Prinzessin kamen heimlich mit.

Da, unterwegs in einer kleinen Stadt, machten sie dann Halt und fuhren in eine kleine Kirche, und an dem Altar stand schon ein Priester mit langem, langem Bart und im schwarzen Talar, und das junge Mädchen wurde da ihrem Königssohn angetraut und wurde dann nachts nach einem finsteren, inwendig wunderschön eingerichteten Schloß gebracht, wo die Eitle gar glücklich lebte in dem Gedanken, nunmehr eine Prinzessin zu sein. Nach einigen Tagen sagte dann ihr Mann zu ihr, daß er auf eine Woche zum König mußte, daß sie ruhig da leben möchte, bis er wieder komme und sie abhole.

So blieb die junge Prinzessin allein in dem finstern Schloß, so schrecklich einsam, wennschon Hoffräulein da waren und eine Menge schön geschmückter Lakaien, um sie zu bedienen. Es waren auch gar schmutzige Weiber da und immer betrunkene Soldaten, die sie gar nicht so recht ehrerbietig grüßten, wie eine Prinzessin verdient hatte und sie auf ihre Mundart nur 'das fremde Fräulein' nannten. Dabei war sie wie eine Gefangene gehalten von ihren Fräulein und Kammerherren, sie durften nimmer das Schloß verlassen und durfte nur in dem Garten umhergehen, immer von Leuten bewacht.

Sie schrieb nun an ihren Mann in der Hauptstadt, er möchte zu ihr zurückkehren oder ein paar ihr bekannte Damen ihr schicken. Keine Antwort kam. Die junge Prinzessin war immer unruhiger; sie wußte nicht, was das alles bedeuten sollte, als eines Nachts eine der Frauen, die sie hatte, in ihr Schlafzimmer geschlichen kam und eine Schublade des Schreibtisches erbrechen wollte, wo das Ehezeugnis lag.

Da, eines Tages, sah sie im Garten das Kind des Schloßkastellans mit einem Zeitungsblatt spielen. Ahnungslos nahm sie es in die Hand und las, daß ihr Mann sich mit der Tochter des Nachbarkönigs verheiratet habe.

Da hatte sie geglaubt, sie hätte falsch gelesen. Aber es stand doch breit und groß gedruckt. Es war ihr, daß sie keine Prinzessin, sondern ein ehrloses Mädchen geworden wäre, durch die Lügenkunst des Königssohnes. Sie wollte nun zum Priester gehen und ihn fragen, ob sie die richtige Frau des Königssohnes geworden wäre. Aber mit Hohnlächeln und Bedauern sagte man ihr, daß es ihr nicht erlaubt sei, in die Stadt zu gehen. Sie war also eine Gefangene und glaubte, sterbenskrank werden zu müssen. Sie aber nahm ihre Kraft zusammen und gab einem Soldaten viel Geld, bis er ihr erlaubte, ein wenig in die Stadt zu gehen, aber nachts heimlich.

Sie raffte also alles zusammen, was sie hatte, und schlich sich so um die Mitternacht aus dem Schloß, unter Todesängsten an den schlafenden Soldaten vorbei und kam auf die Straße. Sie

ging denn an das Haus des Priesters und weckte ihn heraus. Aber sie glaubte, ganz wahnsinnig werden zu müssen, als ein Priester gar verwunder dastand vor ihr, ein ganz anderer als der, der sie eingesegnet hatte, als der mitleidig ihr sagte, daß das Ehezeugnis ein falsches wäre, daß der Priester, der sie einsegnete, ein falscher wäre. Sie wurde aber nicht wahnsinnig. Sie wußte sofort, was sie tun sollte. Flucht! Flucht nach der Heimat über Flüsse und Berge, mag aus ihr werden was will.

Der mitleidige Priester gab ihr nun das Kleid seiner Magd, ein schmutzig altes Kleid, und wie gerne gab sie ihr schönes Schleppkleid her und reiste sofort ab. Es war Winter, und sie erkältete sich unterwegs, daß sie sich zum Sterben krank fühlte; aber sie reiste fort und fort über Sümpfe und Moräste. Sie schlief in einem elenden Heuschober oder in einem schmutzigen Nest der Bauern; sie war nur froh, als sie mit jedem Schritt, den sei tat, aus dem schrecklichen Königreich kam.

Da, an der Landesgrenze, wo es nun zu Ende war, wurde sie von den Grenzwärtern festgenommen, und als sie nun, auf den Tod vorbereitet, sagte, wer sie wäre, da nahm man sie mit in ein Haus und pflegte sie ein paar Tage etwas anständig, und nach ein paar Tagen sagte ihr der Oberst der Grenzwärter, sie könnte heimgehen, wenn sie nur alle Schriftstücke ausliefere und schwöre, alles zu verschweigen. Wie gerne tat sie alles, und sie war nun frei und durfte nach Haus zum Vater fahren und an seinem Hals weinen mit dem alten, schwerbebeugten Mann.

Sie lag da lange und schwer krank und ist auf immer krank geworden, seitdem sie wußte, daß die Prinzessin mit dem Königssohn alles eingefädelt hatte, daß der Lügenhofmann, der nacher mit glattem, frechem Bemitleiden ihr seine Hand anbot, um sie zur ehelichen Frau dem Namen nach zu machen, alles gewußt, was mit ihr geschehen sollte, und einen schlechten Priester bestellt hatte, um sie zu betrügen. Sie lebt, wenn sie nicht gestorben ist, noch heute, einsam, aber nicht allein, denn Gott hatte ihr zwei Kinder geschenkt aus Erbarmen für sie, zwei Engel von seinem Himmel, einen Knaben und ein Mädchen, wie mir euch, meine einzigen Kinder, damit sie noch an Treu und Liebe in den Menschen glaubte und nicht zur Gotteslästerin würde. Sie ist jetzt so glücklich und kann noch lachen der gehabten Leiden und des langsamen Siechtums; denn sie ist die Mutter geworden zweier Engel, die sie Gott hatte finden lassen, als sie so sterbenskrank umherirrte, an Gott und Menschen verzweifelnd.